

和の音ね探訪記

喜多川 保延
(きたがわ やすのぶ)

三歳で日本舞踊、六歳で三味線と唄を習い始める。二〇一一年、祖父の名「保延」を襲名し、以降は演奏・指導のほか、作詞・作曲・演出を手がける新作浄瑠璃の創作にも取り組んでいる。

一の巻



日本の「音」の概念

日本文化における「音」とは、音が鳴った瞬間だけに注目するものではありません。

例えば、お寺の鐘の美しさは余韻にあります。

響きが消えていく間に、桜が散る様に、苔むして行く庭に美が宿る——

これは「侘び寂び」の精神であり、儂さや不完全さの中の美を感じる

心です。

三味線音楽も同じく、音そのものだけでなく音と音の間に耳を傾けることで、江戸の息遣いが聞こえています。



三味線ならではの表現

三味線はたつた3本の糸を、左手の3本の指で押さえながら弦を弾くことで旋律を奏でます。

ギターのようにコードを押さえるのではなく、一音ずつ押さえて弾くのが特徴です。

しかし、その3本の糸から生まれる表現は驚くほど多彩。

虫の声から祭りの賑わいまで、静かな夜から荒れ狂う嵐まで、そして一枚の紅葉が舞い落ちる情景まで豊かに描き出します。

声について

純邦楽における「声」は、西洋音楽とは全く違う発声法を用います。口を大きく開けずに、喉の奥・舌根・鼻音の微妙なコントロールで発音をし、丹田を強く意識した腹式呼吸を使います。

この時に最も大切なのは、母音「あ・い・う・え・お」。これは能や歌舞伎にも共通しています。

また、西洋音楽のように声域や性別で役割を分けず、基本的にひとりで男女すべての役を演じ分けます。曲のキーは歌い手に合わせて変える事ができます。



時次郎は山を尾を
急かれて忍ぶ塵の目に